

オスマン朝年代記『八天国』の 2系統の写本について

——イスタンブル所在の写本群をめぐって——

今 澤 浩 二*

は じ め に

オスマン朝初期史に関する重要史料のひとつに、16世紀初頭、イドリース・ビトリシー (İdris Bidlīsī) がペルシア語で著した『八天国』 (*Hasht Bihi-shht*) と題される年代記がある。これは、『諸年代記の王冠』 (*Tac üt-tevârih*) の著者サーデッディン (Sa'd ed-din) をはじめとする後世の歴史家によって主要な史料として利用され、また近代になってはハンメル以来、重要史料として認識されてきた根本史料である¹⁾。だが、メナージュ氏は1962年に、この年代記にはさほどの史料価値はないとする見解を発表され²⁾、これを受けて濱田正美氏も1984年に、『八天国』を、その内容がほとんどネシュリーの書き直しであると紹介された³⁾。しかしメナージュ氏自身が認めているように、『八天国』には、アシュクパシャザーデやネシュリーによっては採録されなかった、現存しない初期の史料からの引用も散見されるのである。もちろん、それら独自の情報を他史料と突き合わせて検証する必要があるが、少なくとも、史料制約の大きい初期オスマン朝研究にとって、『八天国』が無視しえない重要史料であることに疑いはないのである。それにもかかわらず、この年代記に関しては1920～30年代に写本調査が行なわれた以外、こ

*本学文学部

キーワード：『八天国』、イドリース・ビトリシー、バヤズィット2世、セルム1世、オスマン朝

れまでほとんど研究が為されてこなかった。

ところで、筆者が1990～92年、および2000年にイスタンブルで写本調査を行なった結果、『八天国』の約40種にのぼる写本群は、使われている語句や表現の違いから、2系統に分けられることが判明した。『八天国』を研究あるいは利用するためには、まずこの問題を解明し、利用すべき写本を確定することが必須の作業となる。そこで本稿では、写本調査の結果を提示しつつ、両系統の由来・性格を明らかにし、最後に、利用すべき写本の確定を行ないたい。

1. イスタンブル所在の写本群

1. 『八天国』の構成

『八天国』の写本について述べる前に、まず、この書の構成について見ておきたい。『八天国』は序文 (Ṭalī'a), 第1～8部 (Katība), および跋文 (Khātima) から構成されている⁴⁾。

序文では、『八天国』執筆の動機が語られたあと、2つの序 (Muqaddama) を設けて、歴史学の意義、およびオスマン家と本書の卓越性について記されている。

第1部はオスマンの治世を取り扱う。まず、Ṭalī'a ではオスマン家の出自と系図について記し、続く2つの Muqaddama には、セルジューク朝との関係、オスマンの即位、イラン、トゥラン地方の同時代の諸君主等に関する記述がある。次いで本文に入り、14の章 (Dāstān) が設けられている。その内、第6章までがオスマン即位以前の諸事件、残りがオスマン即位後の諸事件となっている。最後に跋 (Khātima) の部分でオスマンの死が語られる。

第2部はオルハンの治世を取り扱う。序の部分、第1部と同様、Ṭalī'a と2つの Muqaddama とから構成され、Ṭalī'a ではオルハンが即位した理由、Muqaddama ではオルハンの美德と即位、同時代の諸君主等について記されている。本文は18章から成り、オルハン時代の諸事件が綴られる。

第3部はムラト1世の治世を扱う。Ṭalī'a ではムラト1世が即位した理由、

2つの Muqaddama ではムラト 1 世の即位や同時代の諸君主に関して記される。本文は18章。

第4部はバヤズィト 1 世の治世について。序の部分は2つの Muqaddama から構成され、バヤズィト 1 世の即位とムラト 1 世の死、同時代の諸君主に関する記述がある。本文は16章。

第5部はメフメト 1 世の治世を扱う。序は1つの Muqaddama から成り、バヤズィト 1 世がティムールに捕らえられたあとのルーム地方の状況について記されている。本文は28章から成る。最後に Khātima があり、メフメト 1 世の死について語られる。

第6部はムラト 2 世の治世について。2つの Muqaddama にはムラト 2 世の即位、同時代の諸君主に関する記述があり、本文は24章から成る。

第7部はメフメト 2 世の治世を取り扱う。序は1つの Muqaddama から成るが、さらに副章が設けられている。まず、2つの Ṭalī'a はメフメト 2 世の即位、同時代の諸君主とウレマーについて、1つの Qalb はメフメト 2 世の美德、力、軍隊、遠征、建設等について記されている。2つの Janāh はメフメトの子供、宰相、エミールたちについて語られる。本文は29章から構成されているが、右翼 (maymana) の章と左翼 (maysara) の章とに分けられ、それぞれムスリムとの戦い (7 章)、異教徒との戦い (22 章) に関して記される。

第8部はバヤズィト 2 世の治世について。序の部分は、Muqaddama (バヤズィト 2 世の治世、同時代の諸君主)、Ṭalī'a (バヤズィト 2 世の美德、建設、ワクフ)、Qalb (バヤズィト 2 世の即位) に分けられる。続いて本文は2つの Ba'th から構成される。第1 Ba'th は18章から成り、やはり右翼 (8 章) と左翼 (10 章) とに分けられている。第2 Ba'th はさらに2つの Janāh に分けられ、バヤズィト 2 世の子供たち、宰相たち、ベイたち、ウレマー等について記されている。

跋文はすべて韻文から成り、バヤズィト 2 世の王子たちの後継争いや、バヤズィト 2 世の退位、セリム 1 世の即位 (1512) について記され、最後に著

者イドリースの境遇に関する「不平の書」(Shikāyat-nāma)と題される部分がある。

2. 2 系統の写本

『八天国』の諸写本に関する過去の主な調査は以下の通りである。

Fr. Babinger, *Die Geschichtsschreiber der Osmanen und ihre Werke*, Leipzig, 1927, pp. 45-49.

この調査ではトルコ以外(インド, スウェーデン, ドイツ, フランス, オーストリア, 旧ソ連等)の写本が中心に報告されている。特に, Bān-kīpūr, Oriental Public Library, No. 532-534 は自筆本である可能性が指摘されている。

M. Şükrü, “Das Hešt Bihišt des Idrīs Bitlisī (I. Teil: Von den Anfängen bis zum Tode Orḫans),” *Der Islam*, XIX (1931), pp. 131-157.

イスタンブル所在の写本が中心に報告されているが, 網羅的ではない。その他, ベルリン, ウプサラ所在の写本にも言及している。

F. Tauer, “Les manuscrits persans historiques des bibliothèques de Stamboul IV,” *Archiv Orientální*, IV (1932), pp. 95-98.

この調査が, イスタンブル所在の写本については最も詳細で網羅的であり, 信頼性が高い。

C. A. Storey, *Persian literature: A bio-bibliographical survey*, vol. I, part 1, London, 1970, pp. 412-416.

これは, 上記3つの調査結果をまとめたものであるが, トルコ内外の写本について最も網羅的である。ただし記述は簡略である。

筆者は, イスタンブル所在の写本群について最も詳細・網羅的な F. Tauer の調査報告にもとづいて再調査を行なったが, その結果, Tauer の記述には若干誤りが見受けられること, また, 当時から約70年経過していることもあって, 所蔵図書館・書架番号が変更されていることなどが明らかとなった。また, 未調査の写本も数種発見された。こうしたことから, 再度こ

ここで筆者による調査結果を提示したい。

さて、最初にも述べたように、イスタンブル所在の写本群を調査した結果、これらの写本は、用いられている語句や表現の違いから、2系統に分類され得ることが判明した。これに関しては、別稿でバヤズィト1世時代に関する第4部を取り上げて詳しく論じたが⁵⁾、また別の例を挙げておくと、トプカプ宮殿博物館付属図書館所蔵の Hazine 1655 写本の第8部において (f.560a), バヤズィト2世と兄弟ジェム・スルタンの抗争に関する以下のような章がある。

Dāstān-i duwum az akhbār-i maymana-yi maymanat-shi'ār : Dar bayān-i bawā'ith-i rujū'-i Jam Sultān az Mişr wa khurūj dar Qarāmān wa tawajjuh-i Sultān nawbat-i thānī az Qusṭantīniyya bi-'azm-i daf'-i fitna-yi Jam Chalabī wa inhizām-i ū tā sar-anjām-i bī-farjām-i ū ba'd az ān.

(吉兆なる右翼の情報に関する第2章：ジェム・スルタンがエジプトからもどり、カラマンで叛乱を起こした動機、スルタン [バヤズィト2世] がジェム・チェレビの騒乱を排除するため、再度、コンスタンティノープルから進発したこと、および、彼 [ジェム・スルタン] の敗北とその後の彼の惨めな結末について)

これに対して、スレイマニエ図書館 (Süleymaniye Kütüphānesi) 所蔵の Esad Efendi 2198 写本において対応する部分 (f.259a) では：

Dāstān-i duwum az akhbār-i futūḥāt-i maymana-yi maymanat-shi'ār-i Sultānī : Dar bayān-i bawā'ith-i rujū'-i Jam Sultān az Mişr wa khurūj dar nawāḥī-yi Qarāmān wa kayfiyat-i ittifāq-i ū bā a'dā'-i khānadān-i Āl-i 'Uthmān khuşūşan Qāsim Bīk-i Qarāmān-uḡlu dar khuşūmat-i Sultān-i mujāhidān wa guftār-i tawajjuh-i Sultān nawbat-i thānī az Qusṭantīniyya bi-'azm-i fitna-yi Jam Chalabī az mamālik-i Islām wa şūrat-i kasr u inhizām-i Jam Sultān wa firār u iltijā'-i ū bi-Farang wa kuffār-i liyām wa sar-anjām-i ū dar ān tawajjuh-i nā-farjām.

(スルタンの吉兆なる右翼の諸征服の情報に関する第2章：ジェム・ス

ルトンがエジプトからもどり、カラマン地方で叛乱を起こした動機、彼が信仰戦士たちのスルタンとの敵対において、オスマン王家の敵たち、特にカラマン侯カスム・ベイと協調した状況、スルタンがジェム・チェレビの騒乱をイスラーム諸国から〔排除する〕ため、再度、コンスタンティノープルから進発したこと、および、ジェム・スルタンの敗北とフランク人、卑しき異教徒どもへの逃走と避難、その惨めな行動における彼の結末について)

となっており、下線を引いた部分が異なる。スレイマニエ写本の方がほぼ倍の分量となっており、こうした現象は全8部を通じて窺うことができるのである。いま挙げた部分だけを見れば、スレイマニエ写本の方が記述が詳細なように見えるが、その他の部分も考慮に入れると、一般に、スレイマニエ写本の方はトプカプ写本より詳細というよりむしろ、冗長・冗漫といった印象を受ける。こうした違いに着目し、本稿では便宜上、トプカプ宮殿博物館付属図書館所蔵の Hazine 1655 写本の系統をH系統、スレイマニエ図書館所蔵の Esad Efendi 2198 写本の系統をE系統として、以下のように分類した。

[H系統]

H-1: Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphânesi, Hazine 1655.

この写本は過去の調査では漏れているが、きわめて重要な写本である。

350×225mm, 668フォリオ, 23行, ナスターリーク体。序文, 第1～8部, 跋文から成る完全本であるが⁶⁾, 残念ながら跋文の部分で錯簡が生じている⁷⁾。

随所に金箔が施された豪華な写本であり、奥書によると (f.668b), 919/1513-14年にイドリース・ビトリシーが著した自筆本である(実際、後述する他の自筆本とも筆跡が酷似している)⁸⁾。また、この写本の書架記号である“Hazine”がトプカプ宮殿の宝物庫を意味していることから、この写本はスルタンに献呈された作品そのものと考えられる。

H-2: Nûr-ı Osmaniye Kütüphânesi, 3209.

347×237mm, 636フォリオ, 26行, ナスターリーク体。これも, 序文, 第1～8部, 跋文から成る完全本であり⁹⁾, やはり随所に金箔が施されている(トルコ人研究者はこの写本をよく利用する)。

上の Hazine 1655 写本のもと類似した奥書があり(f.636a), やはり919年にイドリース自身が著したになっているが, この写本には数種の筆跡が見受けられる¹⁰⁾。また, わずかながら, 欄外に補足・訂正の文章が散見され, それはイドリースの筆跡に酷似している。つまりこの写本は, 上の Hazine 1655 写本とほぼ同時期に, イドリースの監修下に編纂されたものと推測されるが, 他人の筆が入っていることから, Hazine 1655 写本よりは史料的价值が下がると言わざるを得ない。

H-3: Süleymaniye Kütüphanesi, Esad Efendi 2197.

290×198mm, 557フォリオ, 25～27行, ナスターリーク体。序文, 第1～8部, 跋文から成る完全本¹¹⁾。奥書によると, この写本もまた, 919年にイドリースによって著された自筆本であり¹²⁾, f.1a にも「イドリース・ビトリシーの真筆である」(İdris Bitlisî'nün kendü hattıdır) というオスマン語による但し書きがある。しかし, 本文の欄外には多くの訂正・補足の文章が書き加えられており, Şükrü も指摘するように¹³⁾, この写本は『八天国』の草稿と見なされる。

H-4 Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Ahmed Sâlis 2914.

これも過去の調査では漏れている。310×210mm, 657フォリオ, 24～25行, ナスターリーク体。序文, 第1～8部, 跋文から成る完全本¹⁴⁾。奥書によると 'Abd al-Rahîm が書写しているが¹⁵⁾, 語句の欠落が散見される。トプカプ宮殿博物館附属図書館の目録によると, この写本はヒジュラ暦10世紀(西暦16世紀)に成立している¹⁶⁾。

H-5: İstanbul Üniversitesi Kütüphanesi, Fârsî 619.

この写本は, Tauer の調査時点では Haliş Efendi 3364 という書架番号を持っていた。300×210mm, 451フォリオ, 33行, ナスターリーク体。序文, 第1～8部, 跋文から成る完全本¹⁷⁾。奥書は各部ごとに記されており,

967年シャーバーン月24日/1560年5月20日から968年ジュマーダー I 月19日/1561年2月5日にかけて、Muḥammad b. Bilāl がイスタンブルで書写している。

H-6: Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphânesi, Revan 1515/1.

300×205mm, 358フォリオ (ff.1b-358b), 21～25行, ナスターリーク体。2種の筆跡が確認される。序文, 第1～6部から成る¹⁸⁾。奥書は各部ごとに記されており, 963年ラビー I 月1日/1556年1月14日から964年シャッワール月29日/1557年8月24日にかけて書写が行なわれている。

H-7: Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphânesi, Revan 1515/2.

300×205mm, 128フォリオ (ff.360b-487b), 27行, ナスターリーク体。第8部のみから成るが, 最後の部分が欠落している (Hazine 1655写本の ff.654a, 1.8～655a, 1.3に相当する部分)。奥書は見あたらないが, Tauerによるとヒジュラ暦11世紀に成立している。

H-8: Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphânesi, Revan 1514.

377×240mm, 411フォリオ, 21行, ナスヒー体。序文, 第1～6部から成る¹⁹⁾。奥書はなく, Tauerによるとヒジュラ暦1000年頃に成立。

H-9: Süleymaniye Kütüphânesi, Hâlet Efendi ilavesi 191/1.

これも過去には調査されていない。273×175mm, 368フォリオ, 27行。数種の筆跡・書体 (ナスヒー, ナスターリーク) が確認される。序文, 第1～3部, 第7～8部から成る²⁰⁾。奥書によると (ff.74a, 325a), 976/1568～69年に Muḥammad b. Bilāl がイスタンブルで書写している。

H-10: Süleymaniye Kütüphânesi, Hâlet Efendi ilavesi 191/2.

これも同様に調査されていない。273×190mm, 143フォリオ。行数はページによって変化している。ナスターリーク体で, 数種の筆跡が見られる。第8部 (ff.1b-130b), 跋文 (ff.131a-143b) から成る。奥書は見あたらない。

H-11: Nûr-ı Osmaniye Kütüphânesi, 3082.

305×184mm, 328フォリオ, 19行, ナスターリーク体。数種の筆跡が確認され, f.150で紙質・筆跡が変化している²¹⁾。序文, 第1～4部から成

る²²⁾。奥書はなく、Tauer によるとヒジュラ暦11世紀に成立。

H-12: İstanbul Üniversitesi Kütüphânesi, Fârsî 226.

Tauer の調査では Rizâ Paşa 637 に相当するもの。295×160mm, 178フォリオ, 24行, ナスターリーク体。2種の筆跡が見受けられる。第8部 (ff. 1b-167a), 跋文 (ff.167a-178a) から成る。奥書は見あたらないが, Tauer はヒジュラ暦10世紀に成立したと推測している。

H-13: İstanbul Üniversitesi Kütüphânesi, Fârsî 550.

Tauer の調査では Rizâ Paşa 208 に相当するもの。260×135mm, 196フォリオ, 18行, ナスターリーク体。第7部のみから成るが, 序の部分は省かれており, 本文である Dāstān の部分だけを含む不完全本。奥書はなく, Tauer によるとヒジュラ暦10世紀に成立。

H-14: Beyazıt Devlet Kütüphânesi, Beyazıt 5161.

Tauer の調査では ‘Umūmiye 5161 に相当するもの。270×165mm, 249フォリオ, 13行, ナスターリーク体。第7部のみから成るが, Dāstān の部分だけを含む不完全本。奥書によると (f.249b), 1065年シャーバーン月上旬/1655年6月上旬に成立している。

H-15: Süleymaniye Kütüphânesi, Lala İsmail Efendi 379.

240×165mm, 195フォリオ, 17行, ナスターリーク体。第7部のみから成るが, Dāstān の部分だけを含む不完全本。奥書によると (f.195b), 1079/1668-69年に Ibn Hājī Muḥammad が書写。

H-16: Âtîf Efendi Kütüphânesi, 1948.

250×150mm, 238フォリオ, 16行, ナスターリーク体。第7部のみから成るが, Dāstān の部分だけを含む不完全本。奥書はないが, Tauer によるとヒジュラ暦11世紀に成立。

H-17: İstanbul Üniversitesi Kütüphânesi, Fârsî 769.

Tauer の調査では Halis Efendi 2785 に相当するもの。230×140mm, 193フォリオ, 19行, ナスターリーク体。第7部のみから成るが, Dāstān の部分だけを含む不完全本。奥書によると, 1104年ムハッラム月28日/1692

年12月9日に成立。

H-18: Âtıf Efendi Kütüphânesi, 1946.

365×230mm, 496フォリオ, 27行, ナスターリーク体。序文, 第1～8部から成る²³⁾。奥書によると (f.496a), 1098年ズールヒッジャ月/1687年10月8日～11月6日に書写が完了。

H-19: Millet Kütüphânesi, Alî Emîrî Efendi, Farsça 800.

この写本から H-26: Millet Kütüphânesi, Alî Emîrî Efendi, Farsça 807までは一連の写本である²⁴⁾。

79フォリオ, 23行, ナスターリーク体, 360×215mm。序文 (ff.1b-19b), 第1部 (ff.19b-79a) から成る。

H-20: Millet Kütüphânesi, Alî Emîrî Efendi, Farsça 801.

50フォリオ。以下, 同上。第2部から成る。

H-21: Millet Kütüphânesi, Alî Emîrî Efendi, Farsça 802.

61フォリオ。以下, 同上。第3部から成る。

H-22: Millet Kütüphânesi, Alî Emîrî Efendi, Farsça 803.

51フォリオ。以下, 同上。第4部から成る。

H-23: Millet Kütüphânesi, Alî Emîrî Efendi, Farsça 804.

61フォリオ。以下, 同上。第5部から成る。

H-24: Millet Kütüphânesi, Alî Emîrî Efendi, Farsça 805.

77フォリオ。以下, 同上。第6部から成る。

H-25: Millet Kütüphânesi, Alî Emîrî Efendi, Farsça 806.

166フォリオ。以下, 同上。第7部から成る。

H-26: Millet Kütüphânesi, Alî Emîrî Efendi, Farsça 807.

176フォリオ。以下, 同上。第8部 (ff.1b-159b), 跋文 (ff.159b-176b) から成る。奥書によると (f.176b), 1114年ラビー II 月20日/1702年9月23日に書写が完了している。

[E系統]

E-1: Süleymaniye Kütüphânesi, Esad Efendi 2199.

この写本と次の Esad Efendi 2198 写本は一連の写本である。

373フォリオ, 20行, ナスターリーク体, 364×267mm。イドリースの筆跡に酷似していること, また, マージンを埋め尽くすほどに多くの追加・訂正文が書き加えられていることから, この写本はイドリース自身による草稿と考えられる。第1～6部から成り²⁵⁾, 奥書はない。

E-2: Süleymaniye Kütüphânesi, Esad Efendi 2198.

385フォリオ, 以下, 同上。第7・8部 (ff.1b-217a, 217b-385a) から成る。やはり多くの追加・訂正文が書き加えられた草稿である。奥書なし²⁶⁾。

E-3: Süleymaniye Kütüphânesi, Ayasofya 3541.

395フォリオ, 25行, ナスターリーク体, 数種の筆跡。序文 (280×212mm), 第1～6部 (296×212mm) から成る²⁷⁾。序文の終わりには (f.14a), イドリース自身が918/1512-13年にメッカで作成したことを示す奥書がある。写本の最後ではなく, 序文の末尾に奥書が記されたのは, 序文のみメッカで書かれたためと推測される。また, 序文の部分だけ, サイズがひとまわり小さく, 第1～6部につけ足された痕跡が確認される²⁸⁾。

この系統に属する他の写本では第4部は17章構成であるが, この写本のみH系統と同じく16章構成で, やはりH系統と同様, 第4部の第14章は章題と数行の書き出しのみで, 以後6ページ半にわたって空白となっている²⁹⁾。

E-4: Nûr-ı Osmaniye Kütüphânesi, 3212.

295×210mm, 391フォリオ, 25～27行, ナスターリーク体。第7・8部, 跋文から成る³⁰⁾。数種の筆跡が確認されるが, 第8部は確実にイドリースの筆跡と思われる。量は少ないが, 第7・8部にわたって文中での訂正や欄外への書き込みが見られ, その筆跡はイドリースのものに酷似していることから, 第7部は他人に筆写させ, 最後にイドリースが見直したと考えられる。すなわち, この写本はイドリース監修下の草稿と見なされる。

ただし, 跋文は明らかにイドリースの筆跡でなく, 行数もそれまでの25

行から27行へと変化している。また、紙のサイズも第7・8部よりわずかながら小さく、さらに（写本を閉じて側面から見るとよく分かるが）紙の色がこの部分だけ若干白い。したがってこの写本の跋文も、のちにつけ足されたものと考えざるを得ない。跋文にイドリースによる訂正文が全く見られないこともこの考えを支持している。

この写本および E-3: Ayasofya 3541 と、E-1: Esad Efendi 2199, E-2: Esad Efendi 2198 写本とを較べると、前者の方が文意が通っており、また後者では空欄となっていることが多い年代が、前者に書き加えられていることから、まずイドリースは Esad Efendi 2199, 2198 写本を書き、それを元に Ayasofya 3541, Nûr-ı Osmaniye 3212 に代表される写本を作成したと推測される。Ayasofya 3541 写本で第4部が全16章となり、第14章の大部分が欠落したのも、この過程においてであったと思われる。

E-5: Süleymaniye Kütüphanesi, Ayasofya 3538.

351×258mm, 199フォリオ, 19行, ナスターリク体。第8部のみから成る。奥書はなく, Tauer によるとヒジュラ暦10世紀に成立。

E-6: Süleymaniye Kütüphanesi, Ayasofya 3539.

345×253mm, 95フォリオ, 19行, ナスターリク体。第1部のみから成る。奥書はなく, Tauer によるとヒジュラ暦10世紀に成立。

E-7: Süleymaniye Kütüphanesi, Ayasofya 3540.

353×260mm, 237フォリオ, 19行, ナスターリク体。第1～3部³¹⁾。奥書はなく, Tauer によるとヒジュラ暦10世紀に成立。

E-8: Süleymaniye Kütüphanesi, Ayasofya 3542.

351×256mm, 376フォリオ, 19～20行, ナスターリク体, 数種の筆跡。第1～5部³²⁾。奥書はなく, Tauerによるとヒジュラ暦10世紀に成立。

E-9: Süleymaniye Kütüphanesi, Ayasofya 3543.

358×260mm, 268フォリオ, 21行, ナスターリク体。第4～6部³³⁾。奥書はなく, Tauer によるとヒジュラ暦10世紀に成立。

E-10: Nûr-ı Osmaniye Kütüphanesi, 3210.

300×245mm, 271フォリオ, 19行, ナスターリーク体, 数種の筆跡。第2～5部³⁴⁾。奥書はなく, Tauer によるとヒジュラ暦10世紀に成立。Şükrü も指摘するように³⁵⁾, 本来は第8部に属するバヤズィト2世の王子アフメトの子供たちの割札式に関する記事(右翼の第8章)が, この写本の冒頭に挿入されている(ff.1b-6b)。また, 第4部は第14章までで終わっており, その第14章は大部分が欠落していることから, この写本は上の E-3: Ayasofya 3541 写本に由来すると考えられる。

E-11: İstanbul Üniversitesi Kütüphânesi, Fârsî 225.

Tauer の調査では Rizâ Paşa 888 に相当するもの。295×210mm, 361フォリオ, 19行, ナスターリーク体。ただし, f.155b から紙質・筆跡が変わっている。第1～5部³⁶⁾。奥書はなく, Tauer によるとヒジュラ暦10世紀に成立。

E-12: Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphânesi, Revan 1516.

330×200mm, 580フォリオ, 22行, ナスターリーク体。第1～7部³⁷⁾。奥書はなく, Tauer によるとヒジュラ暦1000年頃に成立。

E-13: Âtîf Efendi Kütüphânesi, 1947.

350×230mm, 263フォリオ, 30行, ナスターリーク体。第6・7部(ff. 1b-64a, 64b-263b)。奥書はなく, Tauer によるとヒジュラ暦1000年頃に成立³⁸⁾。

II. 『八天国』の成立経過

さて, ではどうして, このように2系統の写本が残ることになったのであろうか。これを考えるためには, 『八天国』の成立経過を見る必要がある。幸い, これについてはイドリース自身が『八天国』の序文および, 跋文, 特に「不平の書」と題される部分で詳しく語っている。まず, 序文で記されている『八天国』執筆の動機についてまとめておこう。

アクコユンル朝宮廷に仕えていたイドリースは³⁹⁾, 907/1501-02年, サファヴィー朝の侵攻によって荒廃したイランから逃走し, メッカ巡礼を経てオス

マン朝に避難した⁴⁰⁾。バヤズィト 2 世に歓迎されたイドリースは⁴¹⁾、オスマン朝の起源である 710/1310－11 年から 908/1502－03 年の現在に至るオスマン家の歴史の執筆を命じられた。バヤズィトが言うには、これまでルーム地方の学者たち (fuṣṣalā') や雄弁家たち (fuṣṣahā') がその地方で普及しているトルコ語で多くの著作を簡潔に、また要約の形で著してきたが、それらは雄弁さと内容の魅力、言葉の優雅さに欠けており、またガーズィーの王たちの諸征服や異教徒たちの事件に関する情報の修正が行なわれていない。このためイドリースは、事実を正確に、雄弁な語・文体で述べることにしたという。また、バヤズィトの助言もあってイドリースは、過去の名著—まずは [‘Alā al-Dīn] ‘Atā Malik Juwaynī の歴史書、次いで [Shihāb al-Dīn] ‘Abd Allāh Waṣṣāf の書、次いで Mu‘īn [al-Dīn] Yazdī 著 *Taā’riḫ-i Mu‘īn (Mawāhib-i Ilāhī)*、次いで Sharaf al-Dīn ‘Alī Yazdī 著 *Taā’riḫ-i Zafar-nāma-yi Tīmūrī*—を手本にしたと記している。さらにバヤズィトは、これまでトルコ語で書かれたルームの学者たちの書を見てきたが、後世に伝えるに値するようなものはなかったので、ペルシア語という明瞭な言語で書くように命じたという。この書は 2 年 6 カ月という短期間で完成し、書名はペルシア語で *Hasht Bihi-sht*、アラビア語では *Kitāb al-ṣifāt al-thamāniyya fī akhbār al-qayāsira al-‘Uthmāniyya* と名づけられることとなった⁴²⁾。

すなわち、908/1502－03 年、バヤズィト 2 世によって歴史の執筆を命じられたイドリースは、過去の名著を手本にしたこともあって、やや難解で、技巧的なペルシア語文体で著述を行なうことになったのである。ここに、古くから『八天国』の史料価値が認められながら、あまり利用されてこなかった理由のひとつが見いだされるように思われる。

なお、『八天国』の成立年代に関してであるが、イドリースは 908 年に執筆を開始し、2 年と 6 カ月で完成させたと主張しており、これが事実ならば、『八天国』は 911 年前後に成立したことになる。バヤズィト 2 世時代に作成された『褒賞簿』(*Īn’āmāt Defteri*) にも、911 年ズィルヒッジェ月 16 日 (1506 年 5 月 10 日)、「『オスマン王家の歴史』を物語った」イドリースに 5 万アク

チェが与えられたことが記されており⁴³⁾、イドリースの主張を確認している。しかしながら、『八天国』の最後の記事は913/1507-08年のものであることから⁴⁴⁾、911年にイドリースはバヤズィト2世の前で『八天国』を文字通り朗読し、そののち加筆して、913年以降まもなくにバヤズィトに献呈したと考えざるを得ない。実際、上述の文書によると、イドリースは914年に著作(kitāb)を2度献呈しているが、これは『八天国』全8部を少なくとも2度に分けて献呈したことを示しているに違いない⁴⁵⁾。

さて、跋文に含まれる「不平の書」の部分では、その後の経過が記されている。

913年頃に完成した『八天国』をイドリースは、「スルタン」(前後の文脈から見て、明らかにバヤズィト2世)に献呈した。スルタンは約束の報酬(おそらく *Īn'âmât Defteri* に記された金額)を与えようとしたが、妬み深い側近たちが、“『八天国』は敵、特にイランの諸王を称賛しており、記述は冗長・冗漫で、ささいなことや想像の産物を記している。またイドリースが序文を献呈せずに自分の手元に置いている”と非難したため、イドリースは報酬を受け取れなかったという。これに絶望したイドリースはオスマン朝から去ることを決意し、メッカ巡礼の許可を求めたが、これも側近たちによって妨げられた。ようやく許可が下りたのは、バヤズィト2世の王子たちの後継争いが始まり、アリー・パシャが死んだあとのことであった⁴⁶⁾。

アリー・パシャとは、イドリースの主要な敵対者と見なされる大宰相ハードゥム・アリー・パシャのことであり、彼は917年ラビーⅡ月/1511年7月にアナトリアで戦死しているから⁴⁷⁾、その後まもなくイドリースはメッカ巡礼に旅立ったことになる。このあと跋文では、イドリースがメッカへ巡礼し、その地でセリム1世の即位を知ったこと、セリムから書簡と資金が送られてきて帰国を促され、それを受け入れたことが記され、セリムへの頌詩で作品は終わっている⁴⁸⁾。

セリム1世のもとでイドリースは、チャルディラン遠征やシリア・エジプト征服に同行するなど、バヤズィト2世時代とはうって変わった活躍を見

せ⁴⁹⁾、セリムの死後まもなく、926年ズールヒッジャ月7日/1520年11月18日に没した⁵⁰⁾。

III. 2系統の写本の由来

前章で見たように、跋文（特に「不平の書」の部分）においてイドリースは、『八天国』をまず、バヤズィト2世に献呈したと記している。しかし、H系統を代表する3つの写本（H-1: Hazine 1655, H-2: Nûr-ı Osmaniye 3209, H-3: Esad Efendi 2197）の奥書によると、これらの写本はセリム1世時代初頭の919/1513－14年に完成しているから、これらがバヤズィト2世に献呈されたものではあり得ない。であるならば、E系統の写本群のみがバヤズィト2世に献呈されたものに基づいているとは考えられないであろうか。

ここで、トプカプ宮殿博物館文書局に保管されている一文書を取り上げたい。これは、イドリースがオスマン朝を去ってメッカに滞在していた際、オスマン朝宮廷に宛てたペルシア語による書簡である⁵¹⁾。無念ながら、筆者は研究ヴィザの関係でこの書簡を閲覧することはできなかったが、幸い、この書簡の写真版とトルコ語の要約が公にされている⁵²⁾。写真版はやや不鮮明だが、要約も参照しつつ、以下に大意を示すことにする。

「……以下のことを再度、申し上げたい：高位の宰相たちやナーイブたちは知っているが、私はカーバ神殿に詣ったことを通じて陛下（バヤズィト2世）に仕えるようになったとき、最後の審判の日まで永らえるような歴代スルタンの歴史を執筆するよう命じられた。今や、わずかの間に『八天国』の諸巻は周辺諸国に広まり、名声を得た。これに対して王の報酬が約束されていたが、財と位階に関する約束も望みも満たされなかった。なぜなら私は、陛下の側近たちの妬みにさらされたからである。そして、それだけにとどまらなかった。2年7ヵ月続いた私の努力は、裏切りと侮辱に直面した。私に約束されていた高位は粉碎された。さらに数え切れない侮辱を受けた。①この王朝の敵であり、悪意ある者

である一部の高官たちは私の作品を私の手から奪い、私を拒絶し、陛下の恩寵を失わせた。このため私も、作品の、本質的に王冠の真珠と見なされる序文を手元にとっておいた。こうした行為は、この王家に、またカリフの名声にふさわしくなかった。しかしながら陛下は、私に対する抑圧の代わりに、償うべきことを実行するよう命じられ、私が抑圧されていることを確信して私の権利を回復するようフェルマーンを出されたが、うまくいかなかった。②清書されたメフメト2世に関する部分はタタールのメングリ・ハン（クリム・ハン国君主）へ贈呈された。私が重い病気にかかっているときも、彼らは過去の対立と不正をあきらめず、逆に、私の書を、雄弁さを知らない一群のトルコ人に贈った。

こうして、このような状況の中で、私の執拗な要請によってメッカ巡礼が許された。今回も侮辱と軽蔑を受けた。最下層のイマームやハティープたちに為される装いと装備で出立させられた。ウレマーに行なわれるべき儀式も準備も私には不適切と見なされた。何年も続いた貧困のあと、私はこのような貧しさで巡礼に旅立ち、神と預言者の館に向かった。その6日後、私に与えられていたイクターとティマールも取り上げられた。毎年受けていたわずかな収入も他の者たちに与えられた。自分の諸権利が剥奪された。貴重な生命の一部を、陛下の王家の業績を広めるために費やしたことへの報酬がこれなのか？ こうしたことは、いかなるカーヌーンにも、シャリーアにも見受けられることはなかった。……

③私は生活の糧のために、諸国の王やエミールたちが評価し、好んだこの作品に、このあと序文をつけ、また末尾にも、これまでに起こったことを書き連ねて完成させる。陛下の家臣たちが不快にならないよう！

メッカにおいても、何人かの者がこの『八天国』を書き写し、インドやその他の地に持っていきこうとしている。④この書物にはまだ序文がなく、跋文が欠けている。〔トプカプ宮殿〕宝物庫にあるいくつかの草稿も同様である。

彼らが私にこれらの侮辱と苦悩を与えて以来、私が嫌悪しているその

地へもどる可能性はない。その地にいる私の家族と子供たちが私の許に来るために、陛下の家臣たちの許可を望んでいる。もし許されないなら、この神の御前で彼らへの呪いを始めよう。私の子供たちが私の許へ至るのを妨げる者には呪いがふさわしい。……」

メッカに1年ほど滞在したイドリースは、この恨みに満ちた書簡を一明らかにバヤズィト2世に宛てて—918/1512年頃に送ったと考えられている⁵³⁾。注目すべきは、この書簡の中でイドリースが、バヤズィト2世に献呈した『八天国』には序文と跋文が付けられていないと明言していることである(下線④参照)。そこでもう一度、E系統の写本を見ると、E-3: Ayasofya 3541 写本と E-4: Nûr-ı Osmaniye 3212 の2写本を除くすべての写本に序文と跋文が付されていないことに気づく。しかも、上でも触れたように、前者(Ayasofya 3541 写本)の序文は918/1512—13年にメッカで書かれ、この写本に追加されたものであった。後者(Nûr-ı Osmaniye 3212 写本)に付けられた跋文も、のちにつけ足されたものと推測された。つまり、この2写本にも本来は序文や跋文はなかったのであり、E系統に属するすべての写本に序文・跋文は付されていなかったとすることができるのである。したがって、E系統の写本群は、913/1507—08年頃にバヤズィト2世に献呈された『八天国』に由来すると結論づけられよう。メッカからの書簡によると、バヤズィト2世に献呈した作品そのものは没収され、おそらくは散逸したものと思われる(下線①②参照)。したがって、その草稿と考えられるE系統のE-1: Esad Efendi 2199, および E-2: Esad Efendi 2198, さらにそれを推敲したE-3, E-4 の計4写本はきわめて重要な価値を有すると言えよう。特にE-3, E-4 写本は、バヤズィト2世に献呈されたものにきわめて近い文体・内容を持つと思われる。

そうすると、今ひとつの系統であるH系統の由来もおのずと明らかとなる。この系統を代表するH-1: Hazine 1655 写本は、セリム1世時代の919/1513—14年に成立しており、ほどなくしてセリム1世に献呈されたはずである。つまり、セリムの帰国要請にしたがってオスマン朝にもどったイドリースは、

メッカで作成していた序文・跋文（下線③参照⁵⁴⁾）を付した『八天国』をあらためてセリム1世に献呈したのである。したがってこの系統の写本群は、セリム1世に献呈された『八天国』、おそらくは Hazine 1655 写本に由来すると考えられる。E系統と語句や表現が異なるのは、バヤズィト2世に献呈された『八天国』を改訂したからに違いない。改訂した理由のひとつはおそらく、バヤズィトの側近たちに、敵を称賛しているとか、冗長・冗漫であると非難されたことであろう。メッカからの書簡によれば、この改訂作業はイドリースがメッカにいる頃から開始されていた（下線③参照）。

では、我々はどちらの系統の写本を利用すべきであろうか。もちろんまずは、セリム1世に献呈された正本と考えられる H-1: Hazine 1655 写本（もしくは、H-2: Nur-ı Osmaniye 3209 写本）、あるいはその草稿である H-3: Esad Efendi 2197 写本を参照すべきであろう（自筆本以外の写本を利用する必要はない）。しかし一方で、E系統に属する、イドリースの手になる草稿にも参照すべき点がある。というのは、イドリースは改訂作業において、E系統の写本には記されていたいくつかの記事を削除していると考えられるからである。たとえば、別稿でも論じたが、E系統の写本には記述のある第4部の第14章が、H系統ではその大部分が欠落している。また、E系統の写本ではそれに続く1章が記されているが、H系統では完全に削除されている⁵⁵⁾。しかしながら、こうした部分には、アナドル・ベイレルベイのティムルタシュによるアナトリア北部のカレジク Kalecik、チャンクル Çankırı 征服、およびカラマン遠征、タシュ・イリ（イチ・イル）攻略に関する独自の情報が含まれているのである⁵⁶⁾。要するに、上に挙げた両系統の優れた写本を随時参照することが必要だということである。

お わ り に

以上、イドリース・ピトリシーの『八天国』に関する写本群の成立事情について考察してきた。これらの写本群には2つの系統があるが、それらの由来を明らかにすると、利用すべき写本もおおのずと確定されてきたのであ

た。

まず、イスタンブルに所在する、管見の限り全42種の写本を、その中で用いられている語句・表現の違いに着目し、E系統、H系統に分類した。そして、E系統の写本は、913/1507-08年頃にバヤズィト2世に献呈された『八天国』を代表し、H系統の写本は、919/1513-14年頃にセリム1世に献呈された、いわば改訂版に由来することが明らかとなった。

今後、我々が利用すべき写本は、もちろん、セリム1世に献呈された正本と考えられるトプカプ宮殿博物館附属図書館所蔵の Hazine 1655 写本であるが、一方では、改訂版では削られてしまった記述も残る E 系統の自筆本も、随時参照することが必要である。こうしてはじめて、長年にわたって重要史料と考えられながら、十分に利用されてこなかった（あるいは不当にその価値を貶められていた）この年代記が、史料として復権することができると思われるのである。

[史料略号一覧]

Dhayl: Abū al-Faḍl Muḥammad b. Idrīs Bidlīsī, *Dhayl-i Hasht Bihisht*, Ms. Süleymaniye Kütüphanesi, Lala İsmail Efendi 348/2 (ff.30b-161b).

Hadâ'ik: Mecdî Mehmed Efendi, *Hadâ'iku'ş-Şakâ'ik*, (ed.) A. Özcan, İstanbul, 1989.

Hasht-Es: Idrīs Bidlīsī, *Hasht Bihisht*, Ms. Süleymaniye Kütüphanesi, Esad Efendi 2197.

Hasht-Hz: Idrīs Bidlīsī, *Hasht Bihisht*, Ms. Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Hazine 1655.

Salīm-nāma: Idrīs Bidlīsī, *Salīm-shāh Nāma*, Ms. Süleymaniye Kütüphanesi, Lala İsmail Efendi 348/1 (ff.1b-30a).

Shaqā'iq: Taşköprüzâde, *Al-Shaqā'iq al-nu'māniyya fī 'ulamā' al-dawla al-'Uthmāniyya*, (ed.) A. S. Furat, İstanbul, 1985.

註

- 1) 特にバビンガー氏は、この年代記がオスマン史研究にとっての「宝庫」であ

- ると述べている (Fr. Babinger, *Die Geschichtsschreiber der Osmanen und ihre Werke*, Leipzig, 1927, p. 47)。
- 2) V. L. Ménage, “The beginnings of Ottoman historiography,” in *Historians of the Middle East*, (eds.) B. Lewis & P. M. Holt, London, 1962, p. 176.
- 3) 濱田正美「Ⅶトルコ」『アジア歴史研究入門』第4巻, 同朋舎, 1984年, 683頁。
- 4) トプカプ宮殿博物館付属図書館 (Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphânesi) 所蔵の Hazine 1655 写本にもとづく。また, Babinger, *op. cit.*, pp. 46-47; M. Şükrü, “Das Heşt Bihişt des İdrîs Bitlîsi (I. Teil: Von den Anfängen bis zum Tode Orhans),” *Der Islam*, XIX (1931), pp. 139-141; M. Bayrakdar, *Bitlisli İdris (İdris-i Bidlîsi)*, Ankara, 1991, pp. 43-44 も参照のこと。
- 5) 拙稿「オスマン朝年代記『八天国』の2系統の記述内容—第4部を中心に—」『大阪市立大学東洋史論叢』第11号 (2000), 79-94頁参照。
- 6) 序文: 1b-21a 第1部: 21b-80a 第2部: 80b-127b 第3部: 128b-188b 第4部: 189b-238a 第5部: 239b-300a 第6部: 301b-369b 第7部: 370b-520a 第8部: 521b-655a 跋文: 655a-668b。
- 7) この部分は, fol. 655, 656, 662, 664, 658, 661, 660, 663, 657, 659, 665, 666, 667, 668 の順に読まなければならない。また, 最終部分で1フォリオ欠落している (H-3: Esad Efendi 2197 写本で言えば, f. 556b, 1.5-35 に相当する部分)。
- 8) 筆跡鑑定の間外漢があまり筆跡のことを持ち出すのは慎まねばならないが, 幸いイドリースの筆跡にはかなり特徴があり, 素人にも判別しやすい。
- 9) 序文: 1b-18a 第1部: 19b-71a 第2部: 72b-118b 第3部: 119b-166b 第4部: 167b-212a 第5部: 213b-263b 第6部: 264b-333b 第7部: 334b-491b 第8部: 492b-622a 跋文: 623b-636a。
- 10) Şükrü は, 第1, 2, 4, 5, 7部および跋文がイドリースの自筆であるとするが (Şükrü, *op. cit.*, p. 132), 筆者は違った印象を持っており, 大部分が他人の筆によるものと考えている。
- 11) 序文: 1b-15b 第1部: 16b-65a 第2部: 66b-108a 第3部: 109b-166a 第4部: 167b-207a 第5部: 208b-260a 第6部: 261b-323b 第7部: 324b-443a 第8部: 445b-551a 跋文: 551b-557b。
- 12) ただし第3部には, 明らかにイドリースの筆跡とは異なる2種の筆跡が認められる (cf. ff. 120b-129b, 130a-166a)。

- 13) Şükrü, *op. cit.*, p. 133. また, A. Özcan, “Heşt Bihişt,” *Türkiye Diyanet Vakfı İslâm Ansiklopedisi*, vol. XVII, p. 273 も参照のこと。
- 14) 序文：1b-18b 第1部：19b-72b 第2部：73b-118b 第3部：122b-176a
第4部：178a-220b 第5部：222b-282a 第6部：284b-350b 第7部：352b-510a 第8部：512b-645b 跋文：646a-657b。
- 15) この人物は、イドリースが『セリム・ナーメ』(*Salīm-shāh Nāma*) で言及している Shaykh ‘Abd al-Rahīm ‘Abbāsī (963/1555-56年没) のことかも知れない (cf. *Salīm-nāma*, f. 18a; Ch. Rieu, *Catalogue of the Persian manuscripts in the British Museum*, vol. I, London [first published 1879, photolithographic reprint 1966], p. 219)。
‘Abd al-Rahīm ‘Abbāsī については, *Shaqā’iq*, pp. 411-412; *Hadā’ik*, pp. 410-411 を参照のこと。
イドリースは『八天国』完成後、セリム1世の治世に関する『セリム・ナーメ』の執筆を開始したが、未完のまま没したため、息子 Abū al-Faḍl Muḥammad がスレイマン大帝の命令で、四散していた原稿を集めて編集し、セリム2世時代初頭の974/1566年に完成させた。なお、Abū al-Faḍl はこれとは別に、セリム1世の治世に関して、『八天国』の第9部とも言うべき『八天国続篇』(*Dhayl-i Hasht Bihišt*) を著している (cf. F. Tauer, “Les manuscrits persans historiques des bibliothèques de Stamboul IV,” *Archiv Orientalní*, IV [1932], pp. 98, 103; V. L. Ménage, “Bidlīsī,” *Encyclopaedia of Islam* [new edition], vol. I, p. 1208; C. A. Storey, *Persian literature: A bio-bibliographical survey*, vol. I, Part 1, London, 1970, p. 416)。ただし、『八天国続篇』を『セリム・ナーメ』として利用している研究も見受けられる。
- 16) F. E. Karatay, *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Farsça Yazmalar Kataloğu*, İstanbul, 1961, p. 57.
- 17) 序文：1b-13b 第1部：14a-54b 第2部：55b-89a 第3部：89b-129a 第4部：130b-163b 第5部：164b-206b 第6部：207b-260a 第7部：261a-340b 第8部：341b-441a 跋文：441b-451b。
- 18) 序文：1b-26b 第1部：27b-86a 第2部：86b-129a 第3部：129b-182b 第4部：182b-226a 第5部：226b-289b 第6部：290a-358b。
- 19) 序文：1b-23a 第1部：23b-88b 第2部：89a-142b 第3部：143a-208b 第4部：209a-261a 第5部：261b-327b 第6部：328a-411b。
- 20) 序文：2a-18a (最初の7フォリオ欠落) 第1部：18b-74a 第2部：75b-120a 第3部：121b-176b 第7部：178b-325a 第8部：327b-368b (後半部欠落)。

- 21) Tauer, *op. cit.*, p. 96.
- 22) 序文：1b-24a 第1部：25b-100a 第2部：101b-166b 第3部：167b-253a
第4部：254b-328a。
- 23) 序文：1b-15b 第1部：15b-60a 第2部：60b-93b 第3部：94b-135b 第4
部：136b-174b 第5部：175b-220b 第6部：221b-268b 第7部：269b-390a
第8部：391b-496a。
- 24) ミット図書館所蔵のこれらの写本は、2000年7月の調査時には、前年のトルコ北西部地震の影響でバヤズィト国立図書館 (Beyazıt Devlet Kütüphanesi) に移されていた。
- 25) 第1部：1b-63a 第2部：63b-115a 第3部：116b-172a 第4部：173b-230b
第5部：231b-298a 第6部：298b-373b。
- 26) Şükrü は、この写本がバヤズィト2世の死に関する記事で終わっていると記しているが (Şükrü, *op. cit.*, p. 137), 全くの誤解である。
- 27) 序文：1b-14a 第1部：14b-86a 第2部：87b-144b 第3部：145b-206b
第4部：207b-256b 第5部：257b-322b 第6部：322b-395a (323b-396a)。第6部のフォリオ数は打ち誤っている。本来は 323b から始まらねばならないところが322bとなっている。
- 28) Şükrü は序文のみ自筆であるとし (Şükrü, *op. cit.*, p. 133), 筆者も同意見であるが, Özcan はこの写本全体がイドリースの自筆と考えているようである (cf. Özcan, *op. cit.*, p. 273)。これは、序文の末尾に付せられた奥書からの誤解であろう。
- 29) 第4部における両系統の構成の差異については、前掲拙稿、85-91頁を参照のこと。
- 30) 第7部：1b-221b (途中、空白ページあり) 第8部：222b-377b 跋文：378b-391a。ただし、Tauer, Şükrü 両氏は、この写本が第7・8部のみから構成されているとしている (Tauer, *op. cit.*, p. 98; Şükrü, *op. cit.*, p. 137)。
- 31) 第1部：1b-93b 第2部：94b-167b 第3部：168b-237b (最後の4フォリオほど欠落)。
- 32) 第1部：1b-84a 第2部：85b-144b 第3部：145b-216a 第4部：217b-291b
第5部：292b-375a。
- 33) 第4部：1b-80a 第5部：82b-162b 第6部：163b-268b。
- 34) 第2部：7b-75a 第3部：76b-149b 第4部：150b-200b (後半部欠落) 第5部：201b-271b (後半部欠落)。

- 35) Şükrü, *op. cit.*, p. 137.
- 36) 第1部：1b-89a 第2部：93b-154b 第3部：155b-235b 第4部：237b-278a（第11章まで）第5部：282b-361a。
- 37) 第1部：1b-76a 第2部：77b-137a 第3部：138b-204b 第4部：205b-244b（第11章まで）第5部：245b-326a 第6部：327b-410b 第7部：411b-580a（H系統の記述も混じる）。
- 38) なお, Süleymaniye Kütüphanesi, Ayasofya 4320/2; Nûr-ı Osmaniye Kütüphanesi, 3211 の2写本は, Tauer の指摘通り, ダイジェスト版といった性格を持っており, 史料的价值はきわめて低い (Tauer, *op. cit.*, p. 98, n.1)。また, Süleymaniye Kütüphanesi, Fatih 791/3 写本は, メフメト2世のコンスタンティノープル征服に関する第7部の記事の抜粋である。
- 39) クルド人と考えられているイドリースはアクコユンル朝宮廷にニシャンジュとして仕え, 890/1485年に君主ヤクブ・ベイの名で, 時のオスマン朝スルタン, バヤズィト2世に祝賀の書簡を送り, それは大いに称賛されたという (cf. Ménage, “Bidlîsî,” p. 1207)。
- 40) *Hasht-Hz*, ff.7b-8a.
- 41) 一説によると, イドリースはバヤズィト2世のニシャンジュになったという (Bayrakdar, *op. cit.*, p. 7)。
- 42) *Hasht-Hz*, ff.9a-10a.
- 43) “İn’âm be-mezkûrîn fi 16 Zî’l-hicce, sene 911. Mevlânâ İdrîs, münşî ki tarîh-i âl-i Osman güft. Nakdiye 50000, câme Çatma-i Bursa, sevb.” (İ.Erünsal, “Türk Edebiyatı Tarihi’nin Arşiv Kaynakları I: II. Bâyezid Devrine Ait Bir İn’âmât Defteri,” *Tarih Enstitüsü Dergisi*, X-XI (1981), p. 314)
- 44) これまで, 『八天国』最後の記事は, H系統の写本にもとづいて, 912/1506-07年にフィールーズ・ベイがボスニアのサンジャク・ベイに任命されたこととされてきた (cf. Babinger, *op. cit.*, p. 47; Şükrü, *op. cit.*, pp. 133-134; Ménage, “Bidlîsî,” p. 1208)。しかしながら, E系統の諸写本では, このフィールーズ・ベイの記事に続いて, ワラキア・サンジャク・ベイ, ムスタファ・ベイ, トウルハラ・サンジャク・ベイ, ヒュセイン・アア, およびセメンディレ・サンジャク・ベイ, シナン・ベイに関する3つの章があり, E-4: Nûr-ı Osmaniye 3212, f.376b および E-5: Ayasofya 3538, f.199a では, シナン・ベイに関する最後の記事が913年となっている。E-2: Esad Efendi 2198, f.384b では該当箇所は910年となっているが, それを推敲した E-4 写本（第8部はイドリース

の自筆)で改められたと考えられる。

- 45) “İn’ām be-mezkūrīn, fi 25 Receb, sene 914. Mevlānā *İdrīs*, münşī ki kitāb dāde. Nakdiye 10000 ... İn’ām be-mezkūrīn, fi 29 Şevval, sene 914. ... Mevlānā *İdrīs*, münşī ki kitāb āverd. Nakdiye 7000” (Erünsal, *op. cit.*, pp. 323, 325) また, 916 年にもイドリースは2度, 7000アクチュを与えられている (*Ibid.*, p. 333)。そこにはその理由が記されていないが, 高額であることから, これも『八天国』に関係しているのかもしれない。
- 46) *Hasht-Hz*, ff.665b-666b.
- 47) cf. Ménage, “*Bidlīsī*,” p. 1207; R. E. Koşu, “Ali Paşa,” *İslam Ansiklopedisi*, vol. I, p. 331; R. Mantran, “Ali Pasha *Khādim*,” *Encyclopaedia of Islam* (new edition), vol. I, p. 396.
- 48) *Hasht-Hz*, ff.666b-668b; *Hasht-Es*, ff.556a-557b. cf. Şükrü, *op. cit.*, p. 134; Bayrakdar, *op. cit.*, pp. 8-9.
- 49) セリム1世時代のイドリースの活動については, Ménage, “*Bidlīsī*,” pp. 1207-1208; Bayrakdar, *op. cit.*, pp. 9-11; C. H. Fleischer, “*Bedlīsī*, Mawlānā Ḥakīm-al-Dīn Edrīs,” *Encyclopaedia Iranica*, vol. IV, pp. 75-76 を参照のこと。
- 50) イドリースの没年に関しては, 息子 Abū al-Faḍl が『八天国続篇』の中で記している (*Dhayl*, f.38b. cf. Rieu, *op. cit.*, p. 219)。
- 51) Topkapı Sarayı Müzesi Arşivi, E. No. 5675.
- 52) cf. F. R. Unat, “Neşrī tarihi üzerinde yapılan çalışmalara toplu bir bakış,” *Belleten*, VII-25 (1943), pp. 198-199.
- 53) cf. Bayrakdar, *op. cit.*, p. 8.
- 54) イドリースは『セリム・ナーメ』においても『八天国』に言及し, 跋文をメッカで作成したことを記している (cf. *Salīm-nāma*, f.17b)。
- 55) H系統において第4部が16章構成となり, またその第14章が空白のまま残されたのは, E系統の Ayasofya 3541 写本が代表する写本を元にイドリースが改訂したからであろう。
- 56) 前掲拙稿, 87-91頁参照。

Two Versions of the Ottoman Chronicle *Hasht Bihisht* (The Eight Paradises) from the Manuscripts in Istanbul

Koji IMAZAWA

In the early 16th century, Idrīs Bidlīsī composed an Ottoman chronicle entitled *Hasht Bihisht* (The Eight Paradises) in the elaborate Persian style at the command of the Ottoman Sultan Bayezid II (1481-1512). Although this chronicle has long been considered to have great value as a historical source, few studies have been done of it except for some research about manuscripts made in the 1920's and 30's.

From 1990 to 1992 and in 2000, I engaged in a survey of the manuscripts of *Hasht Bihisht* kept in Istanbul. I discovered that the 41 manuscripts of this work could be classified into two groups based on the idioms and styles used in the manuscripts. In this paper, I try to show the details of the manuscripts of *Hasht Bihisht* kept in Istanbul, clarify the origins of the two versions and identify the manuscripts that should be read.

In conclusion, the E version, represented by Mss. Esad Efendi 2198-2199 of the Süleymaniye library, originated in the work dedicated to Bayezid II in about 913/1507-08. The H version, represented by Ms. Hazine 1655 of the Topkapı Palace library, originated in the work dedicated to Selim I (1512-21) in about 919/1513-14. Therefore, we should first read the manuscripts of the H version, especially Ms. Hazine 1655 in the Topkapı Palace library, which is thought to be the original work dedicated to Selim I. However, it is also worthwhile reading the autographic manuscripts of the E version, representatives of which are Esad Efendi 2198-2199, because the H version is a revised edition of the E version, and in the latter, there is some original information omitted from the former.